

文強勢に関する一考察
—前置詞の働きを中心に—

伊関 敏之*

A Study on Sentence Stress
—with special reference to the Function of Prepositions—
Toshiyuki ISEKI

Abstract

In this paper, we will examine English sentence stress. We will especially investigate and solve the problem why sentence stress is placed on a preposition. The main factors in the accentuation of prepositions are five in all: syntactic factor, semantic factor, pragmatic factor, phonetic (phonological) factor, and the other factor.

In conclusion, we will regard semantic factor as the most important factor.

序論

本研究では、通例文強勢を持たないと言われている前置詞に対して、どのような時に文強勢が来るのかということを中心に色々と考えることを主な目的とする。特に、前置詞に文強勢が来る場合の主な要因として、5つの要因を設定し、それぞれについて詳細に検討する。その前に、文強勢が語の強勢と本質的にどう異なるのかということについて見ていくことにする。

1. 文における強勢

水光 (1985, pp.87-88) では、文強勢と語強勢の違いについて本質的な議論を展開している。大まかに概観しておくことにする。「名詞、形容詞、動詞と大部分の副詞をまとめて内容語 (content word) と呼ぶ。冠詞、助動詞、前置詞、接続詞、関係詞、代名詞、不定詞の to、存在文の there をまとめて機能語 (function word) と呼んでおく。形式語 (form word)、非辞書語 (nonlexical

* 北見工業大学教授 Professor, Kitami Institute of Technology

word) とか文法形式素 (grammatical formative) などとも呼ぶ。文において内容語は強勢を持ち、第3章で述べる条件を除いて機能語は強勢を持たない。文において強勢を持つ語の語アクセントのある音節は、(1)¹の斜体部のように、母音は弱化せず、省略もされず、長めであり、音節頭部の子音も明瞭であり省略されない。その音節は音が大きく (loud, intense) なることもあり (大きくなることは本質的でない)、強勢のないところより聴覚的に際立っている。

文において強勢を持たない語は、母音が残っている時も短い音でしかなく、音量も小さく際立ちがない。内容語は文の中核をなすものである。機能語は周辺の、文法的・形式的な意味を持つものである。(2a) のように内容語だけ並べても文法と文脈・状況などにより、意図する文意はかなり正確に見当がつくが、(2b) のように機能語だけ並べると、その間にどのような品詞の語が来るかは見当がついても具体的にどのような語が来るかは特定しきれない。

(2) a. _____ hat _____ _____ box _____ very expensive.

b. The _____ hat in the _____ box was _____ .

このように、内容語に強勢を与え、機能語に強勢を与えないことと、文法、形式、意味、文脈などにとって大事なところ、予測できないところを際立たせ、大事でないところや予測可能なところを際立たせないということとの間には密接な関係がある。この点に関して、文強勢の位置の決め方と語の内部のアクセントの位置の決め方とは本質的に異なる。アクセントの位置、例えば animal の a は im や al などより重要な意味があるからそこにアクセントがあるのではない。「後ろから3番目の」母音という形式 (form) が決めているのである。機械的 (mechanical) である。」となっている。

ここでの議論を踏まえて、前置詞に文強勢が来る場合について、5つの要因を設定しながら色々と考察していくことにする。

2. 前置詞に文強勢が来る場合の主な要因

2. 1. 統語論的要因

統語論的要因ということは、言うならば文法的・形式的な位置が問題であるということである。(これより先、大文字で書かれた部分は文強勢のある音節を意味する。)

a. He lives right ↘ by it. b. We stayed right ↘ with them. — MacDonald 1974.

「修飾語＋前置詞＋代名詞」の時は、前置詞の種類にかかわらず前置詞が核になる。

c. / ↘ By it / stands a willow-tree. — MacDonald 1974.

¹ (1) a. The *hat* in the *box* was *very expensive*.

b. The *person* who *called* him *up* wanted to *see* him.

「前置詞+代名詞」が文頭などのように無音の右にある時も、前置詞の種類にかかわらず前置詞が核になる。

- d. She wants to have a book **BY** her. (彼女は、本を手元に置いておきたい。)
[by her は、場所を表す]
- e. She wants to have a book **by** HER. (彼女は、自分の著作を持っていたい。)
[by her は、動作主を表す] — Quirk et al. 1985, p.668
前置詞+代名詞が by her などの場合、強勢の置き方の違いによって意味の違いが見られる。
- f. The cat ran from ↘ under it. — MacDonald 1974.
「前置詞+代名詞」の前置詞句が、強勢を持っていない他の前置詞の目的語になった時、中の前置詞が核になる。
- g. What are you ↘ talking about? <cf. What's it (all) ↘ about? は what's it (all) が核にならないから about が代行したもの>
- h. The car we were standing ↘ alongside. — Lewis 1977, p.25.
- i. He's not the person I was looking ↘ after. (cf. He's not the person I was ↘ looking at.)
— Bolinger 1971, p.14.

around, before, behind, below, beneath, beside, between, beyond, inside, opposite, outside, over, underneath (MacDonald 1974) や明らかに複合前置詞と言える alongside のように 2 音節以上の前置詞の多くは意味の種類にかかわらず強勢を持ち、単独で代名詞の目的語を従えて音調句末に来る時は、必ずではないが核になる傾向がある。(ただし、concerning の意味の about と with regard to の意味の over はやはり無強勢であり、核にならない。)

- j. He's ↘ on it. (やる気がある、上手だ。) (cf. He's ↘ working on it.)
- k. What ↘ of it! (それがどうだと言うのですか。) (cf. I had a good ↘ time of it.)
- l. What ↘ about it? (cf. He's ↘ talking about it.)
- m. Where are you ↘ from? (cf. Where do you ↘ come from?)
- n. What('s it) ↘ for? (cf. What's this ↘ arrangement for?)
- o. This is where it's ↘ at! (最高! ナウーイ!) (cf. This is the hotel he ↘ stayed at.)
- p. Who ↘ by? (cf. Who was he ↘ killed by?)

「前置詞 (+代名詞)」のすぐ左に強勢のある語 (通例内容語) がない時は、対比・強調・訂正でなくても前置詞が音調核になる。

- q. He was staying **IN**, I think, Vandervill Hotel.
前置詞の直後が空所ではなく、挿入句となり、前置詞の直後に前置詞の目的語が現れるという形式が崩れている場合にも、同様に、前置詞に強勢が置かれる。
- r. John sat [in the back] 前置詞句 [In, (ə)n].
- s. John [painted in] 句動詞 a girl. [Inn, *(ə)n].

前置詞と同じ綴字の不変化詞（副詞である）は、前置詞と異なり、内容語の強勢を持ち、弱形はない。時には強勢だけでは前置詞か不変化詞かの区別がつかないこともあるが、不変化詞の場合は音が長くなることにより区別される。（以上、a.~c., f.~p.と r.~s.は水光 1985, pp. 125-128 より引用。また、d.~e.と q.は安井 1992, pp. 292-293 より引用。）

2. 2. 意味論的要因

Chomsky and Halle (1968) 以来、文強勢についての normal な場合というのがずっと主張されてきた。それを一言で言うと、「文の中の一番最後にある内容語に primary stress が来る」ということになる。しかし、次のような場合には、その原則は当てはまっていない。

- a. My GRANDmother's died. b. Hey, your COAT's on fire.
c. Mommy, mommy! A BEAR came and bit me. d. The CHIMney-pot's fallen off.
e. The KEYS've disappeared. f. The CAR broke down. —今井 1989, pp.151-153

今井（1989）によれば、「主語への過度の関心集中による述部の overshadowing」とのことである。

次に、本題の前置詞について考えてみる。

- g. There's a lot more TO it than that.
(=There's a lot more than it can claim.)
h. I don't know enough ABOUT it.
(=I don't know enough of its particulars.)
i. He's dead and I'm glad OF it.
(=He's dead and I am glad on account of it.)
j. It looks as if the hurricane were going to be WITH us for a while.
(=It looks as if the hurricane were going to stay here for a while.)

前置詞は常に情報量希薄というわけではなく、上の例では、それぞれ paraphrase した言い方からも明らかのように、十分な意味量を持たされている。 —今井 1989, pp.162-163

つまり、この場合の前置詞は、意味的には内容語に匹敵しているので、文強勢が来ると考えられるのである。

どういう前置詞が音調核になるほど強勢を受けるかを決めるには、いくつかの要因の分解が必要である。MacDonald (1972, 1974) によると、方向を示す (allative) 前置詞は内容語と同じくらいの強勢を受ける。中ぐらゐの強勢の時もあるが、the や a などと同じような無強勢にはならない。方向の前置詞の強勢は2音節以上の前置詞や、目的語が代名詞の時に特に顕著である。次の k.~r. のように、「方向の前置詞+代名詞の目的語」で終る音調句では前置詞が音調核になるが、位置を示す (locative) 前置詞の時はさらに左が音調核になる。

- k. 方向 : They pushed the car ↘ across it. <it のむこうへ>
(cf. They pushed the car across the ↘ river.)
- l. 位置 : They ↘ live across it. <it のむこうに、で>
(cf. They live across the ↘ river.)
- m. 方向 : They moved in ↘ above me. <上の階へ引っ越してきた>
- n. 位置 : She ↘ lives above me. <階上に住んでいる>
- o. 方向 : No matter what the task, I was surprised by the gusto with which he went
(hard) ↘ at it. <it に一所懸命とりくんだ>
- p. 位置 : I have an address for him, but I'm not sure if he still ↘ lives at it.
— MacDonald 1974.

上記のことにはいくつかの制限がある。関係節などで前置詞で終わっている時も方向の前置詞では通例その前置詞が核になるが、前置詞以外のところで方向かどうかの区別ができていながら、方向の前置詞であろうと核にならないのが普通である。

- q. 方向 : Which bed did he ↘ jump onto? (Which bed did he jump ↘ onto? も可)
- r. 位置 : Which bed was he ↘ jumping on? — MacDonald 1974.
(cf. *Which bed was he jumping ↘ on?)

(以上、k.~r. とその説明は水光 1985, pp.124-125 より引用。)

また、次の文における前置詞 at も内容語に近いと言えよう。

- s. — Mike looks at Afua's father's paintings while he works.
(アフアの父親が仕事をしている間、彼の絵をマイクが見ている。)

Afua: We can knock on the other studio, if you like. It's fun to see all the different work. (よければ、他のスタジオを訪ねることもできるけど。いろいろな作品が見られて楽しいわよ。)

Father: Show him the galleries while you're AT it. I'll be done soon.

(その間にギャラリーを見せてあげなさい。私はすぐに終わるから。)

— NHKラジオ英会話 Oct. 21, 1997, pp.56-57

ここでの while you're AT it という表現は、あなたがそれにあたっている(それをしている)間に→あなたがそうやっている間に(ついでに)という意味である。この at は前置詞なのに、動詞に近い働きをしていると考えられる(大杉正明氏のコメントによる)。この部分は、while you're taking a tour of the studios と paraphrase が可能なことから、at は内容語に近いことが裏付けられる。上記の例で言えば、方向を示す前置詞としての用法の o. と同類であろう。

この意味論的要因が、前置詞に文強勢を与える上での一番大きな要因であると思われる。

2. 3. 語用論的要因

a. John washed the CAR. b. John WASHED the car. c. JOHN washed the car.

ここでは、前置詞の例になっていないが、上記のような文強勢の位置の違いは、語用論的要因に基づいていると考える。普通の文強勢は a. だけであり、他は対照的強勢とみなされる。この3通りの文強勢（すなわち音調核）のうちのどのパターンになるかは語用論（どのような状況で何が言いたいか）によって決まるものであり、その選択はアクセントの理論ではなく広い意味でのイントネーションの理論が扱う問題である（cf. 佐藤 1992, pp.41-43）。つまり、文強勢とイントネーションには密接な関係があることがわかる。

d. Put the book ON the desk, not UNder it.

前置詞に対照的強勢が置かれている例。語用論的要因で前置詞に強勢が置かれているが、ノーマルな文強勢のパターンにはなっていない例であるので、今回の議論の中核には関わってこない。

e. Do you see the two hills? My house | is beTWEEN those two hills. (LW)

(⇒ those two hills は旧情報扱い) — 渡辺 1994, p.100

この例は、正に語用論的要因（情報構造上の観点）から前置詞に文強勢が来ているものである。

2. 4. 音声学（音韻論）的要因

a. WHO'S it FROM? (A & T-2)

b. Who FOR? (⇒ whom が文末の場合 for は無強勢: For whom?) (渡辺 1985)

c. Porter, | will you see to my luggage, please? — WHERE TO, sir. (L-t)

d. He RAN ROUND it. (⇒ 名詞を目的語にとれば、He RAN round the SQUARE.) (K)

(この2. 4. と2. 5. に出てくる例文において、大文字で書かれた部分が2箇所以上ある文があるが、文強勢のある音節だけではなく、リズム強勢がある音節にも適用しているためである。)

音節数とは無関係に、音調群の末尾に位置するか、それともあとに強勢を受けるべき語を伴わない状態で末尾近くに位置する前置詞、特に音調群の末尾の人称代名詞を目的語にとっている前置詞はリズムをよくするために強勢を受けることが多い。すべてこれらの場合には核強勢をとることになる。

— 渡辺 1994, p.100

2. 5. その他の要因

a. HEALTH MATTERS | is in 15 minutes, | and then we continue | *I Know Why the Caged Bird Sings* | in OFF THE SHELF | *IN* half an HOUR. (B-RTV)

この例は1音節前置詞で強勢を受けた例であるが、強調の一種と考えら

れよう。放送では前置詞を特に理由がないにもかかわらず強める傾向はある。

b. And YOU RECKless DRIVers | ROAR aROUND those NARrow COUNTRY LANES| to the TERrible PERil of EVeryone ELSE, | ... (O'Connor 1973)

c. We CAN'T buy ROBERT a PREsent | *withOUT* any MONey. (A & T-3)

特別な理由なしに2音節前置詞が強勢を受けている例。 — 渡辺 1994, p. 100

d. We will make a brief stop at Tokyo station. Passengers changing to the Yamanote line, please transfer AT this station. (上越新幹線の中の車内放送)

ここでは前置詞句が焦点のある構成要素になっていて、前置詞に音調核が来ている(前置詞にハイライトと焦点が置かれている)例になっている。

— 阿部 1995.

この駅でという意味の前置詞句では、たとえこの前置詞句全体に焦点があたっている場合においても、station という名詞に音調核が来る方が普通かも知れない。もしそうであるとすると、at という前置詞に音調核が来るというのは、上の a. ~ c. と同じように、特別な理由なしに強勢を受けている例であると考えられることも可能であろう。

なお、伊達(2008, p.144)では、stylistic emphasis という項目を設けて次のように説明している。「放送や public speech などをする者が、対比用法でもないのに前置詞に強勢を置くことがある。」

e. A report ON today's proceedings IN the Parliament will be given BY John Smith OF our news staff.

「このような口調は、毎度の同じ決まりきった放送に liveliness を付加しようとする意図が込められていると考えられる。」となっている。例えば、どこかの会場での場内放送などでは話し手の直接生の声を伝えているであろうが、電車の車内放送は録音テープであろうから話し手の意識も多少は違うかも知れない。ただし、routine work であるから惰性で言っているとも考えられるので、特別な理由なしに強勢を受けていると言った方がよいように筆者には思われる。

N. B. 強勢を受けるかどうかということに関して、次に述べるような群動詞(句動詞とは区別され、look at (動詞+前置詞)、do away with (動詞+副詞+前置詞)、make much of (動詞+名詞+前置詞)などの熟語的な動詞のこと cf. 水光 1994, pp.44-45)を扱っている例を見てみると、その中での前置詞の振舞い方が特に注目される。

a. The hounds were cast OFF. (犬が放たれた。)

b. The proposal was apPROVED of. (案は好評だった。)

c. This is the report he passed ON. (先に送った報告書。)

- d. This is the report he PASSED on. (この報告書に関して意見を述べた。)
 普通、不変化詞には強勢があるが、前置詞にはない。ただし、前置詞のうち、目的語が前置されたために直後に目的語を持たないものは軽い強勢を受ける(統語論的要因)。しかし、それは不変化詞の強勢よりは弱く、特に文末ではその対照は明白になり、a. と c. に示すように不変化詞はその文中で最も強く発音される(つまり、文強勢を受ける)けれども、前置詞は b. と d. に示すようにその直前の動詞より弱く発音される (cf. Live 1965, pp.433-434; Onions 1971, pp. 32-33; Bolinger 1971, p.41)。 (以上、嶋田 1985, pp. 15-16 より引用。)
- e. Show me the gym he RAN in. (彼が走った体育館を示しなさい。)
 f. Show me the cattle he ran IN. (彼が追い込んだ牛を示しなさい。)
 g. Show me the house he RAN in / ran IN. (彼が駆け込んだ家を示しなさい。)
 h. Is that the spot that was PASSED by / passed BY?
 i. Is that the bridge that was CROSSED over / crossed Over?
 j. Is that the wall it was LEANED against / leaned aGAINST?
 k. What were they SPEAKing about / speaking aBOUT?
 l. What did you GO after / go AFter, the milk? (何を求めていたのか、そのミルクか。)

ところが、位置の変化を表す前置詞と長い前置詞(例えば *against*, *after*, *about*)はその例外で、強勢を受けることができる (Bolinger 1971, pp. 41-44)。上の e. の *in* は位置を表す前置詞、f. の *in* は不変化詞、g. の *in* は位置の変化を表す前置詞である。(以上、嶋田 1985, p. 16 より引用。)ここでの位置の変化を表す前置詞というのは、意味論的要因であると言える。前述の水光(1985)では、方向を示す前置詞という名称になっている。ラベルは異なっているが、言い表していることは同じである。以上のようなことから、前置詞にノーマルな文強勢が来る一番大きな要因としては、意味論的要因を挙げるのが妥当であると思われる。ただし、この位置の変化を表す前置詞(別名、方向を示す前置詞)になぜ文強勢が来るのかについては、述べられていない。この前置詞に関して見れば、前述の while you're AT it における *at* などのように、内容語に匹敵するほど意味的に豊富な情報が盛り込まれているわけではない。その辺の理由付けについては、今後の課題としたい。

なお、動詞+前置詞、動詞+不変化詞などの成句表現について、ストレスの位置に関する有益な考察が井上・八木(2008)においてなされている。主に、英和辞典における成句表現のストレス位置が問題となっており、英語教育においても役立つものであるので、参照されたい。

また、伊達(2008)においてもこのような成句表現(慣用句)を扱った

例が数多く載せられており、大変有益である。その中から2つの例を挙げておく。

m. Once you make up your mind, stick TO it. cf. STICK to it. (ditto)

n. A: Could you tell me how to learn English?

B: Just keep AT it.

この2例について、念のため2つの英和辞典で調べてみると次のようになる(表記は本論文の方式に従っており、強勢のある音節は大文字で表している)。

(1) 『ジーニアス英和辞典』第4版(略称 G4)の記述の仕方

o. STICK to it

p. KEEP AT it

(2) 『ルミナス英和辞典』第1版(略称 ルミナス)の記述の仕方

q. STICK TO it

r. keep AT it (ただし、keep には第2強勢を表す記号が付いている)

この2つの辞書(G4とルミナス)以外の辞書を見ても、記述の仕方はさまざまであり、一定してはいない。同じイディオムでも前置詞の強勢が異なるところが興味深い。私見では、stick to it については G4 の記述、keep at it についてはルミナスの記述の方が妥当であろうと推測する。

いずれにせよ、今後意味論的要因を中心にさらなる検討が必要である。

3. 結論と今後の課題

結論を一言で言うとするれば、次のようになる。前置詞に文強勢が来る場合の要因としては、上で述べた5つの要因の中では、意味論的な要因が一番大きな要因であろうということである(ただし、その際にはノーマルな文強勢ということに適用範囲を限定している)。

今後は、文強勢について、ノーマルな場合とそうでない場合の違いについてより一層明らかにして、それらとこの5つの要因との関係をさらに深く考察していくことが肝要であると思われる。

なお、この前置詞という品詞は、最近の生成文法では、内容語のカテゴリーに属しているという提案がなされているようである(佐藤寧氏のコメントによる cf. 阿部 1995, p. 105)。ちなみに、Cruttenden and Faber (1991) では、前置詞は 'fuzzy' な area の中にある品詞であるとしている。つまり、内容語か機能語かを一義的に決めることはできず、その地位は不確実なものであるとしている。彼らが言うには、前置詞に関して、正確にどの地点から働きが機能語から内容語になるのかを言うことは不可能であるとのことである。ただし、彼らは前置詞を機能語として扱うのが無標な選択であるとしている。

上述のうち、どちらの説を受け入れるにせよ、または第3の説を唱えるにせよ、このような前置詞という品詞の機能および立場が現在のところ非常に流動

的であることは確かであり、この大きな問題点を解決に導くことが、前置詞に置かれる文強勢についての問題点を考察していく上での突破口になりうるかも知れない。

*本論文は、英語音声学会（現：日本英語音声学会）第3回東北支部大会（1999年11月27日 於：東北学院大学）における口頭発表の原稿を加筆・修正したものである。

参 考 文 献

雑 誌

NHKラジオ英会話 東京：日本放送出版協会

辞 典

Konishi, T. (小西友七) and K. Minamide (南出康世) (編集主幹) 2006. 『ジーニアス英和辞典』第4版. 東京：大修館書店.

Takebayashi, S. (竹林滋), Y. Kojima (小島義郎) and N. Higashi (東信行) (編) 2001.

『ルミナス英和辞典』第1版. 東京：研究社.

Abe, H. (阿部秀樹) 1995. “Alternative to semantic role for explaining nucleus placement on preposition.” 『Nebulous(ねびゅらす)』第23号 (明治学院大学大学院英文学専攻『ねびゅらす』会), pp. 87-106.

Arnold, G.F. & Tooley, O.M. 1971. *Say It with Rhythm*. Book 2. London: Longman.(A&T-2)

_____. 1972. *Say It with Rhythm*. Book 3. London: Longman.(A&T-3)

Bolinger, D. 1971. *The Phrasal Verb in English*. Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press.

Chomsky, N. and M. Halle. 1968. *The Sound Pattern of English*. New York: Harper & Row.

Cruttenden, A. 1990. “Nucleus placement and the three classes of exception” in S. Ramsaran (ed.) *Studies in the Pronunciation of English*. London: Routledge.

Cruttenden, A. and D. Faber. 1991. “The accentuation of prepositions” *Journal of Pragmatics* 15: pp. 265-286.

Date, T. (伊達民和) 2008. 「ディスコース中に前置詞が強勢を受ける事情」 学術論文集『英語音声学』第11号・12号合併号, pp. 141-160. 愛知：日本英語音声学会.

- Imai, K. (今井邦彦) 1989. 『新しい発想による英語発音指導』英語指導法叢書. 東京: 大修館書店.
- Inoue, A. (井上亜依) and K. Yagi (八木克正). 2008. 「英語音声表記の問題点—英和辞典における前置詞・不変化詞を伴う成句のストレスについて—」学術論文集『英語音声学』第11号・12号合併号, pp. 55-69. 愛知: 日本英語音声学会.
- Kingdon, R. 1958. *The Groundwork of English Intonation*. London: Longmans. (K)
- Lewis, J. W. 1977. *People Speaking: Phonetic Readings in Current English*. London: Oxford Univ. Press.
- Live, A. H. 1965. "The discontinuous verb in English." *Word* 21, pp. 428-451.
- MacDonald, R. R. 1972. "A brief note on stress on prepositions in English." *Languages and Linguistics Working Papers* 6, pp. 75-78. Georgetown University School of Languages and Linguistics.
- _____. 1974. "Prepositions and stress in English." *Languages and Linguistics Working Papers* 8, pp. 46-52.
- O'Connor, J. D. 1973. *Phonetic Drill Reader*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Onions, C. T. 1971. *Modern English Syntax*. New Edition of *An advanced English syntax*. London: Routledge and Kegan Paul.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Sato, Y. (佐藤寧) 1992. 『英語の文と音声』東京: 研究社出版.
- Schmerling, S. F. 1976. *Aspects of English Sentence Stress*. Austin, Texas: Univ. of Texas Press.
- Shimada, H. (嶋田裕司) 1985. 『句動詞』新英文法選書5. 東京: 大修館書店.
- Suiko, M. (水光雅則) 1985. 『文法と発音』新英文法選書1. 東京: 大修館書店.
- _____. 1994. 『フォーカス カのつく ランドマーク 高校総合英語』大阪: 新興出版社啓林館.
- Yasui, I. (安井泉) 1992. 『音声学』現代の英語学シリーズ2. 東京: 開拓社.
- Watanabe, K. (渡辺和幸) 1985. 『英語のリズム・ハンドブック』東京: 弓プレス.
- _____. 1994. 『英語のリズム・イントネーションの指導』東京: 大修館書店.

音 声 資 料 (1)

(-t はテキストの付属テープを表す)

(L-t) Linguaphone: English Course & American English Course, 1st edition.
(英&米)

(LW) C. S. Lewis. The Lion, the Witch, and the Wardrobe. (英劇)

音 声 資 料 (2)

(B-RTV) <英(B)のラジオ, テレビ放送>